フィールド（現場）からの風 ㊷

宮田守男

言葉と声の両方を見て 感じる事が求められている

北京五輪ノルディクスキー複合で個人3大会連続メダル獲得・団体での28年ぶりのメダル獲得は、地元白馬出身の渡部暁斗・善斗選手などの選手育成に携わった皆さんの喜びは格別だったに違いない。

ソチ五輪で銀メダルを獲得して帰国後に成田空港で報道陣に暁斗選手が語った「マニアが楽しむような複合競技だと思う。底辺拡大とかも期待できない」とのコメントが強く印象に残っている。国内でラージヒル競技と運動量が求められるクロスカントリーコースが共存し、常に地元が整備をしている白馬は最適な練習場所だ。しかし全日本選手権などレベルを求められる大会開催には多額の開催経費も必要となり、開催を引き受ける地元も多くなかった事も事実だった。

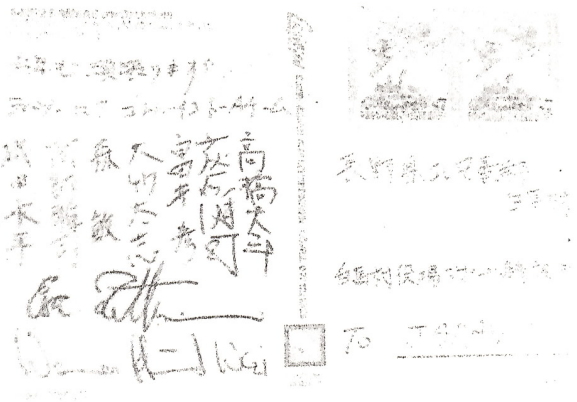
全日本スキー連盟の選手育成を担っていた成田収平さんや長野スキー連盟役員が、村長を訪ね大会を引き受けてほしいとの申し出は、開催によって日本選手を世界の舞台で活躍させたいとの熱き願いでもあった。このシーンは今でも鮮明に思い出す。今回の活躍は、選手育成のために大会を数多く引き受け続けた成果なのだと評価されるべきではないだろうか。

楽しみにしている「第35回第一生命サラリーマン川柳コンクール」の全国優秀100句の作品で「デジタル化しますと紙で通知する」「あっ、マスク　降りた階段また登り」「マスク顔確信持てず見つめ合う」が強く印象に残る。世相を巧みに表現できる能力が羨ましくなる。

ジャーナリストの故むらのたけじさんの「100歳のジャーナリストからきみへ」の中の言葉に「疑いを向けられた時は相手があなたの真剣さを確かめたいと思っている証拠。そっぽ向かず信頼関係の始まりと考えればよい」「うそをつく時は小声になる。ほらを吹く時は高声になる」と。言葉はうそをつくが、声は正直で隠し事はできない、言葉と声の両方を感じる事が大切と訴えた。

詩人の長田弘さんの詩の「世界はうつくしいと」の1節「あざやかな毎日こそが、わたしたちの価値だ。うつくしいものをうつくしいと言おう。うつくしいものの話をしよう」。忘れかけている言葉の力を信じて、実行し続ければ、コロナ過での生活の中からも楽しむべき思い出がたくさんある事に気づくはずだ。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



オーストリア・ラムソーからコンバインドAチーム全員が署名した絵葉書、白馬も頑張ろうとの連帯感が生まれる